ブックウオッチング

街の本屋さん

西沢書店

（福島市）

大震災の翌日も開店

東京電力福島第1原発事故の影響で揺れる福島。福島市に1909（明治42）年に創業し、今年103年を迎える老舗「西沢書店」がある。

江戸末期、長野の善光寺参道にあった土産物店が起源。店主が善光寺の僧にお供して京都へ出向いた帰りに経本や論語を仕入れて売るようになったという。その後、福島、新潟、栃木に進出。屋号を「西沢書店」と変え今に至っている。

「100年続いたのは、地域に密着して地道にやってきたから」と常務取締役の小林政敏さん(62)＝写真＝は話す。教科書販売を委託されており、学校や官公庁も得意先だ。

3月11日はくしくも創業記念日。「地鳴りとともに壁がギシギシ揺れ、本や物が飛んだ」と営業部長の古川博さん(39)は振り返る。客の悲鳴とともに、大町本店では蔵書7万5000冊のうち2割近くが棚から落下。市内の別な場所にある北店では15万冊の約8割が床に散乱した。

道を挟んだ周囲の店舗は停電した。夕方、雪が降り始めると、電車が止まり帰れなくなった学生や勤め人たちが、明かりがともっていた店内に集まってきた。従業員は散乱した本を片付け、避難者のために場所を空けたという。

市内は古い家屋が倒壊し、信号も消えた状況だったが翌12日は高校の教科書の発売日。「生徒さんが来るかもしれず、休むわけにはいかない」と店を開けた。教科書を買いに来たのは6人だったが、お客さんが「ああ、やっていたんだ」と喜ぶ姿に「責任を果たせた」と安堵した。

その12日に福島第1原発1号機の建屋が爆発、14日には3号機も水素爆発を起こし県内の状況は悪化。ガソリン不足などから新刊雑誌が届かなくなった。「運転手が福島に来たがらない」とのうわさにいらだちが募った。

流通が復旧し、被災地の状況を伝える本が出版されると次々と売れた。地震や放射能関連の本の出版も相次ぎ、店内に特設コーナーを設置した。県外への避難者は約6万2000人(県調べ)。避難を考える人も県内にとどまる人も「ここではみんなが当事者。いろいろな本をそろえ、考える材料を提供したい」（古川さん）との願いからだ。

昨年秋には、沿岸部の被災地の小中学校30校に本を贈るプロジェクトに参加した。スタッフが、お薦めの本を選び段ボール箱に詰めこんだ。「おもしろい本を何回も読んだので本のゆめを見ました」「ぼくは本のおかげで、かなしくなったとき、のりこえました……」。子どもたちから届いたお礼の手紙は「書店冥利につきる」と2人とも顔をほころばせる。

「ありがとう故郷、ありがとう福島」。店舗の壁面には昨年末、こんなメッセージを掲げた。白い雲が浮かぶ青空の、その青い部分に「ありがとう」の文字が浮かぶデザイン。「今年は福島が元気になるイベントを計画したい。いつまでもへこんでいられませんからね」という小林さん。老舗書店の底力が問われている。【上東麻子、写真も】

郷土作家のコーナーには冲方丁、玄侑宗久、開沼博の本が並ぶ。「地元の作家は応援したいですね」と話す古川さん

創業103年の老舗

西沢書店大町本店（福島市大町7の20、☎024・522・0161）。福島駅から徒歩10分。営業時間は午前9時半～午後7時。年中無休。子ども向けのお話会、大人向けの朗読会も定期的に開いている。詳細は同店のウェブサイト（http://www.books-nishizawa.jp/）。